

平成 22 年 5 月 28 日現在

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2007～2009

課題番号：19520641

研究課題名（和文）近世ヨーロッパの神学的ペスト文書—世界の脱魔術化に関する学際的研究

研究課題名（英文）Theological scripts on pestilenz in the early modern era: Inter-disziplinary studies on the emancipation of the world from magic

研究代表者

佐々木 博光 (SASAKI HIROMITSU)

大阪府立大学・人間社会学部・准教授

研究者番号：80222008

研究成果の概要（和文）：

ヨーロッパ・ペスト史の研究は、中世の黒死病（1347-51年）と19世紀末のペスト菌の発見に集中した。中世にペストは神罰と見られた。ペスト菌の発見に至る道程は、ペスト観が脱魔術化する歴史であった。この過程を明らかにするために、近世のペスト文書を検討した。三つの宗派（カトリック、ルター派、カルヴァン派）の神学、医学、行政に関わるペスト文書の比較考察から、三宗派それぞれがペスト観の脱魔術化に果たした役割を明らかにした。

研究成果の概要（英文）：

Historical studies of pestilenz in europe made both the medieval, so called „black death“ (1347-51) and the discovery of pestbacillus in the end of the 19<sup>th</sup> century to the main subjects. The pest was regarded as the punishment of God in the Middle Ages. The way to the discovery of pestbacillus was a history of freeing from the spell of the sight for pest. In order to realize this process, I have studied scripts on pest in the early modern era. Based on the comparative studies of such theological, medical and administirative scripts from tree denominations (Catholics, Lutheranners and Calvinists), I suggest, each denomination played a role in freeing from the spell of the sight for pest.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2007年度	1,100,000	330,000	1,430,000
2008年度	900,000	270,000	1,170,000
2009年度	800,000	240,000	1,040,000
年度			
年度			
総計	2,800,000	840,000	3,640,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：史学・西洋史

キーワード：ジロラーモ・フラカストーロ、「ペストの種子」、テオドール・ベーズ、医療と社会格差、アンブローゼ・パレ、トマス・シデナム、ペスト毒、ペスト病院

## 1. 研究開始当初の背景

筆者はこれまで黒死病がヨーロッパで流

行した時期（1347-51年）に、ドイツで起こったユダヤ人迫害について研究してきた。

そのさい、黒死病について同時代の史料が語るところが驚くほど少ないということに気がついた。伝統的な西洋史研究が黒死病の及ぼしたインパクトを大きく取り挙げてきたことを考えるならば、これは意外ともいえる事実であった。黒死病の終息後も、ペストは17世紀後半まで周期的にヨーロッパを襲った。ペストに関する考察や記述は、16世紀以降格段に増加する。それにもかかわらず近世のペストに関する文書は、内外を問わずこれまで研究の対象とされることがほとんどなかった。

## 2. 研究の目的

黒死病の原因を同時代人たちは神罰と語った。そこから19世紀の後半にペスト菌が発見されるまでの経過はいまだ不明である。近世のペスト文書を考察し、ペストに対する視線が脱魔術化する過程を明らかにしようとした。

## 3. 研究の方法

研究期間の三年間、毎年一定期間ヘルツォーク・アウグスト図書館でペスト文書の解読に従事した。近世を世界が脱魔術化する時期と形容したマックス・ウェーバーの研究方法にならない、聖界関係者、医師、行政の発したペスト文書を、三つの宗派（カトリック、ルター派、カルヴァン派）ごとに分類し、比較考察した。

## 4. 研究成果

ペスト文書を神学的、医学的、行政的ペスト文書の三種類に分け、それぞれを宗派ごとに考察した。

神学的ペスト文書では、ペスト感染説に対する対応の違いを最初に考察した。中世以来ペストは腐敗した空気（ミアズマ）を吸うことによって広まると信じられた。1546年にイタリアのパドヴァの医師ジロラーモ・フラカストーロは、ペストが微細な物質を介して伝播すると主張した。彼はそれを「ペストの種子」と呼んだ。種子に触れたものがペストに罹り、そうでないものは感染を免れる。この説では、同じペストによって死亡者と生存者が出る違いを、ミアズマ説よりも合理的に説明することができた。しかしこれはペスト死を神罰、神の怒りと説明してきた神学者、教会関係者には由々しき事態であった。なぜならペストによる死は、必然的なものでなければならなかったからだ。

感染説の登場によってそれが偶然の所産と化す可能性が生じたのである。神学者をはじめ、誰もがペスト感染説に反対した。転機になったのは、カルヴァンのジュネーヴの後継者テオドール・ベーザが1579年に発表したペスト文書である。この文書のなかで、ベ

ーザは神学者としてはじめてペスト感染説を支持する態度を取った。ベーザはペスト感染説を認めたとしても、ペスト死は偶然にはならないことを証明する。彼はキリストの磔刑を例に取り、それは壮健な若者を襲った突然の死としては偶然であるが、神によって予定された死としては必然であるという。キリストの磔刑と予定説を使い、彼はすべての死に偶然と必然が入り混じっていると説く。したがってペスト死の原因として感染説を認めたとしても、ペスト死は偶然にはならないという。

ルター派の牧師ヨハネス・レーディングガーがベーザの議論に呼応した。彼は1583年に発表したペスト説教のなかで、ベーザにならない医学の新説としてペスト感染説を支持する態度を取った。しかし神学の領域では旧来の神義論によるペスト解釈にあくまでも固執した。そこでは医学の新知見の出る幕はなかった。

ルター派のレーディングガーは医学と神学の領域を峻別した。互いの領域を支配したのはまったく異なる原理であった。いっぽうカルヴァン派のベーザの議論は医神の合一を目指した。彼にとって医学の領域における真理は、神学の領域においても真理でなければならなかった。ふたりのペスト感染説に対する態度の違いは、ルター派とカルヴァン派の一般的な性向の違いに呼応する。ルター派は真の信仰が問題になる内面世界と現実世界を分けて考える傾向がある。したがって現実世界に対する態度はともすれば妥協的になりがちである。これに対してカルヴァン派は内面世界と現実世界の敷居を設けない。両者の合一を目指す。したがって現実世界に対する態度は非妥協的である。感染説のお膝元であるカトリック世界の聖職者は、感染説に触発されることがなかったようだ。彼らのペスト文書には、医学の新説の洗礼を受けた痕跡はまったく見出せない。

三宗派の関係者のペスト感染説に対する対応の違いは、非常に興味深い。しかし感染説をめぐる関係者の議論が沸騰したのは16世紀後半のこの時期だけで、それ以後の神学的ペスト文書で感染説が話題になったケースを筆者は知らない。興味深い違いではあるが、この違いを宗派の傾向の違いにまで敷衍することができるのか、それとも単なる個人的意見の違いにとどまるのか、判断を留保せざるを得ない。むしろ宗派的な違いは別のところに現れる。

ルター派の教会関係者のペスト文書では、おしなべて贖罪の価値が強調される。罪を悔い、赦しを乞うのが第一である。したがってペストに対する彼らの態度は一種消極的に映る。カトリック関係者のペストに対する対応は善行を重視する。ペスト聖人に対するペ

スト退散の祈願、行列への参加、護符の購入が信者に勧められる。カルヴァン派の関係者は信者に神を畏れ、ペストを恐れるなど説く。かつて神罰と理解されたペストは神の側にあった。しかしカルヴァン派の理解では、ペストは神と対極の側に立つことになった。ペストはもはや神罰ではなく、克服すべき対象と理解された。「戦闘の教会」はペストに対しても戦闘的な対応を示したのである。三宗派の神学的ペスト文書をキーワードでまとめるならば、贖罪（信仰）、善行、恐れ克服という意味での恐れということになるであろう。

つぎに医師たちの反応はどうだったのか。医師の宗派を同定することは、教会関係者のそれを行うほど容易ではない。宗派が確実に確定できるケースよりも、確定できないケースのほうが多い。確定できる場合にも、医師たちにとって宗派への帰属がどれほどの重みをもっていたのかは、おそらく個人によって千差万別であり、はっきりしたことはわからない。このような状況で、医師たちのペストに対する対応を宗派別に考察することには、おのずと限界が付きまとう。しかしそのような限界をあえて承知した上で、医師たちのペストに対する姿勢の宗派的な個性について、ふたつの仮説を提示したい。

近世の医師たちのペスト文書では、特にふたつの問題について議論が紛糾している。そしてこれらの問題をめぐって、宗派ごとの医師たちの考え方の違いが明瞭になる。ひとつは医療と社会格差の問題である。医学的ペスト文書は病因論、予防、治療の三部からなる。ルター派の医師たちは、予防と治療において、貧者と富者でペスト医療を分けることをもれなく提案している。予防は薫蒸と食事療法がメインである。治療の手段としては発汗、通痢、瀉血などがある。予防では薫蒸に使う材料や食事内容に貧者と富者で差を設ける。治療でも用いる薬品に差をつける。理由は貧者が富者と同じ高額医療を負担できないことにある。医療の内容に差をつけなければ、貧者の医療費を市が肩代わりしなければならず、それは市の財政にとって非常に重い負担となる。ルター派の医師たちはその点をドライに、貧者と富者の医療を分けることで対応しようとした。

カトリックの医師たちのペスト文書でも貧者と富者というカテゴリーは重要である。しかしカトリックの医師たちは両者に対する医療を分けようとはしない。富者に寄付を勧め、それによって貧者の医療を賄おうとする。貧者にも富者と同じ医療を提供しようとする姿勢が、カトリックの医学的ペスト文書の特徴である。

ルター派とカトリックの医師の考え方の違いは、両方の救貧観に由来しているのかも

しれない。昔の学説では、宗教改革によって修道院が廃止されたことで、プロテスタント世界では修道院が担っていた慈善的な救貧事業は影を潜め、貧困は怠惰から起こる矯正されなければならない悪徳と理解された。いっぽう修道院が生き残ったカトリック世界では、慈善による貧者の救済はその後も善行と意識され続けた。これに対して最近の救貧研究では、カトリック世界でもプロテスタント世界と同じように、貧困を悪徳と見なす意識の変化が進行したと主張される。しかし医学的ペスト文書に垣間見えるのは、昔の学説が強調したふたつの世界の救貧観の違いである。この点については、いま一度改めて考えてみる必要がある。いずれにしてもルター派とカトリックの医師たちが考える医療とは、社会的な医療であった。

カルヴァン派の医師たちのペスト文書では、貧者と富者というカテゴリーは登場しないか、登場しても重要ではない。フランスの改革派の外科医アンブロワゼ・パレは、16世紀末の彼の外科学に関する大著のなかでペストについても言及している。そこでは貧者や富者といった社会層のカテゴリーが問題になることはなく、種としての「人間」が問題になるだけである。提供される医療という点で老若男女は配慮されるが、貧富の差が考慮されることはない。これが大学教育を受けていない、民間医療の携わるたたき上げの外科医の発言であることに注意したい。またイングランドのピューリタンの医師トマス・シデナムも、彼の17世紀中葉のペスト文書には社会層への配慮は認められず、問題になるのは「患者」である。彼にも貧富の差で医療を分けるという視点はない。すでに触れたように、ルター派とカトリックの医師たちの念頭にあったのが社会的な医療だとすれば、カルヴァン派の医師たちが考える医療とは、学問的で医療であった。

ふたつ目はペストの毒が予防や治療に使えるかどうかという問題である。カルヴァン派の医師アンブロワゼ・パレのペスト文書には奇想天外なペスト予防がある。パレは感染説を知らなかったようである。彼はペストの病因論として伝統的なミアズマ（瘴気）説をとっている。パレはペストがはやり始めたら、町中の犬や猫を殺害し、屍体を道路に敷き詰め、新しい瘴気によってペストの瘴気を追い払うことを勧める。行政が医師の助言を得て発布したペスト条例では、通常はペストの時期には動物を市内に持ち込まない、動物の死体はできるだけ早く処理するよう指示される。このような行政の常道に照らしてみると、パレの発想はかなり突飛である。しかし毒をもって毒を制する方法は、16世紀の医療世界でペストの治療法としてその有効性が真剣に議論された。

ペストの毒の利用にはいろいろな方法が提案された。たとえばペストの腫瘍から感染した体液を抽出し、それを腫瘍部分に塗布することによって、毒の吸引作用を利用して体内のペスト毒を体外に排出するという方法がある。しかし感染者から抽出したペスト毒を健常者に投与する可能性を考える方向へと、徐々に議論は収斂する。予防接種の発想である。おそらく一度感染して蘇生したものが、その後は感染しにくいということが経験的に知られていたのであろう。16, 17 世紀の医療世界では、天然痘ばかりでなくペストにも予防接種の可能性が模索されていた。しかし毒性の強いペストが予防接種に不向きなことはすぐに誰の目にも明らかとなった。18 世紀には予防接種の可能性は天然痘についてだけ議論されるようになり、ジェンナー以前にすでに実施の成功例もあらわれ始める。ペスト毒の利用については三宗派の医師で異なる対応が見られた。

カルヴァン派の医師は毒を利用した新しいペスト医療に積極的であった。ペスト医療でその可能性が放棄された後も、天然痘予防でそのパイオニア精神は遺憾なく発揮された。ジェンナー以前の種痘の成功例は、ほぼ例外なくカルヴァン派の医師による試みであった。ジェンナー以前には人から抽出した液が摂取されていた。それは毒性が強く、失敗するケースも少なくなかった。ジェンナーの功績は毒性の弱い牛痘液を使って、摂取に伴うリスクをできるだけ少なくしたことである。ジェンナーの新しい種痘法を大陸で普及させるのに貢献したのは、エジンバラ大学で学んだジュネーヴ出身のカルヴァン派の医師たちであった。そのことはイヴ＝マリ・ベルゼの研究が教えてくれるところである。カルヴァン派の医師たちは、当時の最先端の医療に積極的にアクセスした。

16 世紀のルター派の医師たちも、ペストの毒を投与すべきかどうかについて散々議論している。彼らは予防や治療に対するペスト毒の投与の可能性を認めるが、おしなべてその実施には慎重な姿勢を崩していない。それは 18 世紀の種痘の有効性をめぐる議論にも受け継がれている。ルター派医師のあるものは、医師たちが危険を周知せずに種痘を実施し、それがときとして悲惨な結果を招いていることが、種痘の普及を遅らせていることを指摘する。医師たるものの心得として、種痘技術を改良し、危険度を少しでも少なくするよう努力すると同時に、被験者に対して説明責任を果たすことが説かれる。医療倫理にかかわる問題がすでに議論の俎上に上がっていたのである。

カトリックの医師たちは、宗教上の理由を盾にとって毒の摂取に最後まで抵抗した。イヴ＝マリ・ベルゼも指摘しているように、カ

ルヴァン派の医師たちが種痘法の普及に先陣を切ったのとは対照的に、イタリアやフランスといったカトリック国の医師たちは種痘法の導入に激しく抵抗していたのである。

カルヴァン派では宗教関係者も医師も、新しいアイデア（ペスト感染説や種痘法）に積極的に反応し、それを推進していた。行政も比較的よくそれに応えていた。いっぽうルター派は新しいアイデアの可能性は認めるものの、実施にはなお慎重な姿勢を崩さなかった。そこから患者と医師のインセンティブ・コンセンサスを重視するような考え方の萌芽も生まれた。カトリックは新しいアイデアのパイオニアを輩出した反面、宗教関係者も医師もその受け入れには消極的で、宗教的な理由から久しくそれに反対した。医療が万能視された時代には、このような態度は反近代的と切り捨てられたが、医療に対する懐疑にも正当な配慮が向けられるようになった現在では、このような態度も近代を構成する一要素と評価することができよう。このようにペスト文書の宗派別の考察から、近代の医療や医療倫理を構成する諸要素の淵源を探り当てることができた。

行政的なペスト文書は都市や諸侯の侍医が作成することが多く、医師のペスト観を大きく反映することになった。行政のペスト対策については、依然として集積した史料を解読中で、詳しくは今後の課題としなければならない。ここまでの考察で気づいたことを一点だけ挙げておきたい。貧者と富者の医療を分けるというルター派医師の姿勢は、患者の収容施設にもあらわれている。ペストに対する施設としてこれまで注目されてきたのは、14 世紀後半のヴェネツィアを発祥地とし、その後ヨーロッパ中の諸都市に広まった каранティーネと呼ばれる隔離施設（検疫所）である。来港者、来市者を一定期間この施設にとどめ、発病しないことを確認してから入港、入市させるのである。隔離施設とは異なり、都市にはペストに感染した患者を専門に収容するペスト病院もあった。ニュルンベルクのようなルター派の都市では、ペスト病院も貧者向けと富者向けの二種類が分けられていたという報告が得られている。

ジローラモ・フラカストーロは 16 世紀中葉に、ペストは「ペストの種子」によって広まるという考えを発表した。彼は間違いなく 350 年後に起こるペスト菌の発見の端緒を開いた。しかしフラカストーロはまだペストの種子を無生物と考えていたふしがある。ドイツ出身のイエズス会士アタナシウス・キルヒャーが 17 世紀中葉にフラカストーロの議論を参照し、彼の言うペストの種子が生物であることを指摘した。さらにキルヒャーは顕微鏡を使い、ペストの種子をスケッチしている。それは現在ではペスト菌とは別物であるこ

とが明らかになっている。キルヒャーから19世紀末のペスト菌の発見に至る道程はまだ明らかにされていない。またペスト医療の進展の道筋も明らかにはなっていない。三宗派の神学的ペスト文書の個性、医師たちのペストに対する個性的な対応は、本考察からかなり明らかになったが、各宗派における神学と医学の連関を突き止めるには至っていない。山積するこれらの諸問題については、すべて今後の課題として、研究を続けたい。

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計4件)

- ①佐々木博光、論説、査読無、「啓蒙主義と人文学—近代ドイツにおける歴史の科学化、科学の歴史化—」南川高志編『知と学びのヨーロッパ史—人文学・人文主義の歴史的展開—』ミネルヴァ書房、2007年、167-192頁。
- ②佐々木博光、書評、査読有、大黒俊二著『嘘と食欲—西洋中世の商業・商人観—』、『史林』91巻、2008年、762-769頁。
- ③佐々木博光、史料翻訳・解題、査読無、「ペスト対話に見える近世ヨーロッパ(一)」『人間科学：大阪府立大学紀要』5巻、2009年、123-135頁。
- ④佐々木博光、論説、査読無、「ペストの創作—ニュルンベルクのユダヤ人迫害、一三四九年—二月五日」『人文学論集(大阪府立大学人文学会)』28巻、2010年、1-26頁。

〔学会発表〕(計2件)

- ①佐々木博光、「ペストと宗教改革—「神学的ペスト文書」の射程—」、西洋史読書会第74回大会、京都大学、2006年11月3日。
- ②Sasaki, Hiromitsu, Die Pestschriften in der Frühen Neuzeit im Kontext der Entzauberung der Welt, Stipendiatenkolloquium in der Herzog August Bibliothek, 10. 12. 2007. Herzog August Bibliothek in Wolfenbüttel.

〔図書〕(計1件)

翻訳、ロニー・ポチャ・シャー著、佐々木博光訳『トレント 1475年—ユダヤ人儀礼殺人の裁判記録—』昭和堂、2007年、239頁。

〔産業財産権〕

○出願状況(計0件)

○取得状況(計0件)

〔その他〕

ホームページ等

#### 6. 研究組織

(1)研究代表者

佐々木博光 (SASAKI HIROMITSU)

大阪府立大学・人間社会学部・准教授

研究者番号：80222008